日本橋報社の第一作『在日中国人大全』1998年４月刊行後、読売新聞一面名物コラムにも登場。(1998.7.10)

The Duan Press

日本橋報社・書籍案内

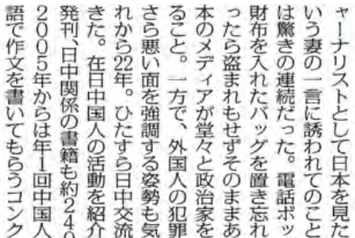
171-0021 東京都豊島区西池袋 3-17-15
Tel.03-5956-2808 Fax.03-5956-2809 http://jp.duan.jp info@duan.jp

朝日新聞社・論座二〇〇六年四月号の新連載「出版魂」第一回に登場。

段躍中が 2013.5.27 日本記者クラブで初めて講演。毎日新聞論説委員が一面コラムで紹介。

日中国交正常化 30 周年記念出版物『永遠の隣人』。初めて図書新聞に登場。(2002.10.29)

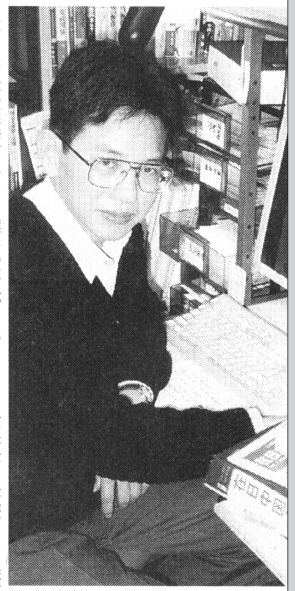
『「氷点」停刊の舞台裏』をはじめ、『「氷点」は読者とともに―いま明かす苦闘の歳月』、『「氷点」事件と歴史教科書問題』等四作を連続刊行。朝日新聞読書面に登場。(2006.7.16)



『在日中国人大全』を出版した留学生として朝日新聞に初めて登場。（1998.4.26）

「在日中国人大全」を出版した中国人留学生

ひと　段（だん）躍（やく）中（ちゅう）さん



厚さ五㌢近い完成本を手に「これだけの中国人が日本で活躍しているんですね」。著者本人が驚いている。

四十歳の誕生日の十二日に出版された「在日中国人大全98―99」は、日本で活動する学者、実業家や中国系企業などのデータブックだ。人名は約一万人、企業や書物などの情報は約五万件。九百五十㌻に及ぶ。注文販売が主だが、目標は「一万部！」。

二年前に百㌻弱の第一弾を出し、「在日中国人研究の必需品」と評価された。が、中身の薄さが不満で、すぐ次作の準備に入った。昨春買ったパソコンを武器に、一年弱で情報量十倍の本を仕上げた。

北京の「中国青年報」記者から一九九一年に留学で来日。すぐに買った電子手帳に、書店で見つけた在日中国人の著作を登録する日課が「大全」への一歩となった。

「一日中、データを整理していても飽きないんです。私、情報オタクだから」

「蛇頭」など犯罪絡みで中国人が取り上げられる機会が増えたことも、出版の動機になった。「一生懸命働いて、日本に貢献している中国人もいるんです」

中国でこうした本を出そうとしても、様々な規制で不可能に近いことは肌身に感じている。一方、離れて一層、祖国への思いは募る。来日後に生まれた三歳半の娘が中国語を身につけるよう、北京の妻の両親に預けたばかりだ。

大全には、八四年ごろから客死した在日中国人約百人の一覧もある。病気、自殺、殺人――。原因を論評抜きで並べた。中国には、いまだに日本を「黄金の国」とあこがれる庶民が多いが、「成功者だけじゃない。異国で生きる厳しさを知ってほしい」。

新潟大大学院で社会学を学ぶ。妻の住む埼玉県川口市と行き来する。いつか中国で日本人向け新聞を出したい。大全作りで卒業が一年延びたのは、助走期間と考えている。

文・写真　及川　智洋

「日本に来て何よりよかったと思うのは言論の自由です」

この一冊

中国の歴史教科書問題

袁　偉時著

偏狭な歴史認識に警鐘を鳴らす

中国有力紙「中国青年報」の付属週刊誌「氷点週刊」が年初に「報道規律違反」で停刊処分を受けた事件は、共産党政権の言論弾圧強化の動きとして内外に波紋を広げた。本書はその契機となった袁偉時・中山大学教授の同誌掲載論文を中心とする関連文集である。

中国の歴史教科書が偏狭なナショナリズムを培養していることを実証的に論じて説得力に富む。筆致は歴史学者らしく冷静、客観的だが、内容は共産党政権の歴史認識や教育宣伝の誤りを鋭く指摘して目を見張らせる。

「皆さん、我々はオオカミの乳を飲んで育ったのです！」。一九七九年、党中央宣伝部長の鄧力群は毛沢東を批判して処刑された女性の生涯を悼み、こう語った。文化大革命などでおびただしい犠牲者を出したことへの、党幹部としての痛切な自己批判だった。

著者はこの言葉をキーワードに中国の歴史教科書や、共産党政権の歴史認識を問い直す。「オオカミの乳」とは「十九世紀以降の極端な民族主義と階級闘争を絶対化した偏狭な思想」のことで、それは現在も歴史教科書を通じて脈々と生き続けているというのだ。

一例が義和団事件。中学校の歴史教科書はこれを「愛国の壮挙」と称賛する一方、「八カ国の連合軍は北京を占領し、放火、殺人などの悪事を尽くした」と断罪している。しかし義和団は「鉄道など西洋文化に関係するあらゆるものを破壊」し、外国人ばかりか中国人に対しても大量殺害や略奪を繰り返し、「北京での死者は十数万人に上った」。これだけの愚挙に教科書は一字も触れていない。

「反西洋を愛国」、「野蛮な犯罪を革命」と言いくるめる思想は、文革や昨年の反日暴動も継承している。著者は「法治と言論の自由を確立して民族文化の自己更新能力を高めないと、中国文化も博物館送りになってしまう」と警鐘を鳴らしているが、同感だ。

教科書が日本の対中侵略の罪ばかりを糾弾するのに対し、日本が孫文らを支援して中国の近代化に寄与した時期もあったことを指摘している。共産党は著者を「中国人民の反侵略闘争を否定した」と批判しているが、果たしてどちらが真の愛国主義だろうか。

（武吉次朗訳、日本僑報社・二、六〇〇円）
▼えん・いじ　32年、中国広東省生まれ。中山大学哲学部教授。著書に『中国現代哲学史稿』『晩清大変局中的思潮与人物』『路標与霊魂的拷問』など。

2006.11.12 日本経済新聞　評・編集委員　山本勲

「外から少しずつ変えていきたい」

「外から少しずつ変えていきたい」。祖国に対する段さんの思いだ

「天安門」胸に発信

中国人元記者　日本で出版社

人物語（ひと・ヒト）

東京・池袋の住宅街。事務所を兼ねる一軒家を訪ねると、発送を待つ本が玄関先に山積みされていた。

「永遠の隣人」「日中和解・共栄への道」――中国批判の本が目立つ街の書店では、なかなか見かけないタイトルの本ばかりだ。

「誰もやらないから、私がやるんです」。編集から発送までを一人で手がける段躍中さん(49)は、笑みを浮かべた。

「若い時からバリバリの体制派でした」。建国の父・毛沢東と同じ湖南省に生まれたことが誇りだった。中国共産党の青年組織、中国共産主義青年団が発行する全国紙「中国青年報」の記者になれたのも、党の指導に忠実だったからだ。

日本にやって来たのは33歳の時。「妻が東京の大学に留学し、寂しさに耐えられなかった」と振り返る。

初めて見た外の世界。何より衝撃を受けたのは、それまで決して目にすることのなかった中国批判があふれていることだった。

凶悪犯罪が起きるたびに、中国人犯罪組織の存在が取りざたされた。外を歩いているだけで職務質問を受ける。中国人というだけで犯罪者扱いされるのには我慢ができなかった。

「そこは元記者。言葉には人を動かす力があるという思いがありまして」。来日の翌年、読売新聞の「気流」欄に「外国人留学生の記事、明るい面も報道して」という見出しの投書が載る。これを手始めに新聞や雑誌への投書を繰り返すようになり、採用された文章は100本を超えた。

中国の良い面も日本人に知ってもらいたい。小さな出版社を設立したのは、そんな思いからだった。

日本に来てもう一つ驚いたことがある。新聞の風刺漫画だ。政治家が、その人と分かる形で批判されている。「中国なら即逮捕。これが言論の自由なのかと新聞を持つ手が震えました」

来日する2年前のこと。北京の天安門広場は、民主化を求める学生や市民であふれかえっていた。座り込みを続ける彼らの声に耳を傾ける。が、それが紙面を飾ることはなかった。

記者が伝えたいことを伝えられない新聞とは……。夜の編集局で同僚と泣いた。軍が発砲を開始したのは数日後だ。記者をやめて日本に渡る決心がついたのは、そんな経験があったからかもしれない。

戒厳令下の天安門広場（89年5月20日）。軍は6月3日深夜から翌4日未明にかけて武力弾圧した

天安門事件から19年。この夏には北京に聖火がともり、多くの人が命を落とした広場はマラソンのスタート地点になる。

国を挙げての招致活動でやっとつかんだ五輪開催。そこから新時代への一歩を祖国が踏み出してくれたらどんなにうれしいことか。

だが、五輪を目前にしてなお、祖国に変化の兆しは感じられない。ギョーザ事件、チベット問題……。小手先の対応をみていると、世界の厳しい視線を自覚しているとは思えないのだ。

最近は中国人向けの本も出し始めた。日本の良い面を紹介する本が多いが、それだけではない。政府による言論統制の実態など、内にいては知ることのできない祖国の現実を報告した書物もある。

祖国への誇りと、祖国が変わらないことへのもどかしさと。二つの思いを胸に出版を手がけた本は170冊を数える。

外にいるからこそ、できることもある。世界の誰もが認める国に――その日を信じ、日本から情報を発信していく。

（梅村雅裕）

THE YOMIURI SHIMBUN
讀賣新聞
2008年（平成20年）
4月6日日曜日

「中国人の日本語作文コンクール」主催で、朝日新聞「ひと」欄に二回目の登場。（2006.5.30）

中国語作文コンクールを開いた日中交流研究所長

ひと　段（ドゥワン）躍（ユエ）中（ジョン）さん(48)

日本人が対象の中国語作文コンクールは珍しい。奔走したのは、日中の相互理解を深めることが、在日中国人の責務と決意したからだ。

「犯罪や反日デモの報道だけで、暗いイメージが祖国に定着するのは耐え難い」

243人が応募、優秀作36点に和訳を付け、「我們永遠是朋友」（私たちは永遠の友人）と題し出版した。中国の新聞社などに100冊を送った。

「日本語が読めない中国人にも、中国が好きな日本人の心情が伝わる意義は大きい」

きっかけは、中国人学生向けの日本語作文コンクールの表彰式に、04年に招かれたことだ。大森和夫・国際交流研究所長が私財を投じ、12年間続けてきた。中国人の日本語能力の向上と、対日理解の進展ぶりに感激した。

大森氏が事業の継続に限界を感じ断念したため、引き継ぐ一方、日本人も中国語で発信すれば「国民同士の本音の交流が広がる」と思い、日中交流研究所を設立した。

妻の日本留学を機に、中国青年報社を退職し、91年に北京から来日。在日中国人の活動を紹介する情報誌「日本僑報」を創刊、130冊の本を出版してきた。メールマガジンの読者は約1万人。

だが、不信感は日中双方の一部に根強い。自身のブログが批判されることもあり、運営費の工面にも四苦八苦だ。

来年は国交回復35周年。「受賞者同士が語る場を作り、顔も見える交流にしたい」

文・写真　伊藤　政彦

今週の本棚　2012年（平成24年）7月8日（日）

MAINICHI
毎日新聞

NHKラジオ深夜便『今、中国が面白い』を大きく紹介

今、中国が面白い　2012―2013年版

而立会訳、三潴正道監訳（日本僑報社・2625円）

中国の最新の動きを報道する記事を、日本人の視点から選んだものである。都市、環境、人権、就労、医療、教育など十五のテーマに分けて紹介されている。

時事報道とは違って、厳選されたのは社会問題についてのコラム。取り上げられたのは中国国内で注目を集めた問題が多いが、高速鉄道事故の安全管理のように、海外で報道された問題の後日談もある。また、個人による監視ビデオカメラの設置や、医者不足なのに医学部卒業生の半分が就職できない原因など、中国独特の社会問題も紹介されている。

書き手は記者に限らず、専門家の寄稿もあれば一般市民の投書もある。政治批判などはむろん期待できないが、市民生活に影響を与える問題を報道し、責任を追及することができるようになったのは印象的である。内容は多岐にわたり、中国社会の変化と中国人の日常生活を知る手掛かりにもなる。

このシリーズは年一冊刊行され、二〇〇七年版から数えて六冊目になる。情報としての価値はもちろん、中国人がどのような問題に関心があり、メディアでいかに報道されているかを知る上でも役に立つ。（競）

2013年1月17日午前4:05からのNHK「ラジオ深夜便」に、監訳者の三潴正道麗沢大教授が出演、40分間に渡り、インタビューに答えた。好評につき2月28日に再放送された。
番組録音
http://duan.jp/news/jp/AM130117nhk.MP3